

Title	マクリン先生の思い出
Sub Title	
Author	山元, 一(Yamamoto, Hajime)
Publisher	慶應義塾大学大学院法務研究科
Publication year	2017
Jtitle	慶應法学 (Keio law journal). No.38 (2017. 9) ,p.1- 3
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	ジェラルド・マクリン教授追悼記事
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1203413X-20170911-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マクリン先生の思い出

山 元 一

私たちの敬愛する同僚であるジェラルド・P・マクリン先生は、2016年5月2日に逝去されました。私が法務研究科の教員に加えていただいたのは開設から4年後の2008年4月のことでしたので、マクリン先生が2004年4月の法科大学院創設以来、その国際化に向けて貢献された草創期のご活躍については、残念ながら直接は存じ上げません。法科大学院発足直後から、アメリカのいくつかの有力な法科大学院と交流協定を締結し、コンスタントに海外からの留学生を受け入れてきたのは、マクリン先生のご尽力によるところが大きかった、とお聞きしています。そして、マクリン先生は、生前かねがね、日本の法科大学院もアメリカの法科大学院にならってJ. D. コースに加えてLL. M.

コースを併設するべきだ、と考えておられ、その際の教育は英語で行うべきだ、と提唱されていた、とお聞きしています。

2017年4月に法務研究科には英語で教育を行うグローバル法務専攻が設置され、それに伴って従来のJ. D. コースが法務専攻から法曹養成専攻に改称されて、二専攻の教育体制となりました。日本で初めてこのような体制を整えることができたのは、マクリン先生がまず土台を作られ、情熱を持って私たちの進むべき方向を示してくださったからにほかなりません。もしマクリン先生がご存命であれば、グローバル法務専攻コースの誕生を他の誰よりも喜ばれたに違いありません。

私が法務研究科に赴任した当時は、

マクリン先生とはそれほどお話をする機会に恵まれませんでした。マクリン先生とぐっと親しくなったのは、2013年4月の春学期にマクリン先生が開講していた Comparative constitutional law の授業に私が毎週出席するようになってからです。ちょうどこの頃から私は、専門領域に関して英語でのプレゼンの要請が来るようになり、それまで習得に努めていたフランス語を離れて、英語でのコミュニケーション能力の向上に向けてもがきはじめるようになりました。専門分野の憲法の授業ということで、この授業に毎週出席させていただきました。そこでマクリン先生の教育者としての素晴らしさの一端に触れることになりました。ユーモアを大変大切にされ、授業中時々、＜私たちの合言葉は、We love law だ！＞と、拳を上げておられました。交換留学生と日本人学生の両方から、とても愛されていることがよくわかりました。無知をさらけ出して恥ずかしいのですが、6月に渡米して英語でプレゼンをする直前の回のとときに、“Are you nervous?” と声をかけられたのですが、その意味がわからず困ったことを思い出します。

そしてこの年の10月には、法務研究科と現在最も密接な関係にあるワシ

ントン大学法科大学院により交流を深めるために、マクリン先生、片山委員長と三名で出張し、アジア法センターで英語で拙い講演をしました。極度の緊張状態で講演をする私を暖かく見守っていただきました。

この出張では、シアトルの空港まで前日に到着していたマクリン先生が迎えに来てくださいました。片山先生は更に遅れて合流されたので、その日の夜はマクリン先生と二人で鮭料理で有名なレストランで食事をする機会に恵まれました。シアトル市内の景色のいいところにも車で連れて行っていただきました。車の中での話の途中で、マクリン先生は、実は定年の遅い別の私立大学から移籍の話があったけれども、慶應が大好きだから定年までいるつもりだ、とっておられました。

そのころから、私は、ワシントン大学のサマープログラムに参加する学生の選考面接と一緒にしたりするなど、お仕事をともにする機会が増えてきました。温かいお人柄のマクリン先生は、それだけでなく人の能力や適性を的確に判断することのできる鑑識眼をもった人だったと思います。LL. M. コースの設置と運営で大活躍をしていたというデイヴィッド・リット教授を

法務研究科にネイティブ教員としてお招きする際、彼をおいてこのポストを付けるべき人は他にいないと断言されており、まさにその通りになりました。マクリン先生がご存命であれば、本年度から色々ご指導・ご助言を頂く機会がさらに増えたのではないかと思うと、早すぎるご逝去が本当に残念でなりません。謹んでご冥福をお祈り申し上げます次第です。